

特別
寄稿

語る！

2



佐藤栄佐久氏
(郡山の自宅で)

誕生
少年時代

私は、昭和十四年六月二十四日、欧米で戦争が勃発したころ、郡山市清水白で、房雄・セツの長男として生まれました。

その後、日本も参戦し、第二次世界大戦になっていったころ、郡山の洋服関係が企業合同し、父がその代表となり、駅前に移りました。

信頼、人間関係こそ大事

「絆を結び直さなければ」

父は、本宮で明治時代のハイクラな洋服屋を起こして、佐藤嘉吉の次男坊で、家業を継いだ長男の嘉一と同じ道を歩むのが当然と定められ、学校を出ると同時に、東京四谷の洋服屋さんに修業に出て、そのあと、郡山で独立となったようです。

向上心強かった父

大体が無口な人で、余計な話など一切したことがありません。家族の食卓でも、静かに酒を飲むだけで、大きい声など出したことはほとんど見たことがありません。

向上心が強くて、洋服屋さんの修業時代、消灯になってからも本が読みたくて、トイレの中で勉強したという話を聞いたことがあります。

幼少のころの記憶といえば、母や弟、生まれたばかりの妹と一緒に、偶々四月二十九日の郡山大空襲の日、荷車で大槻のあたりに疎開し

た思い出があります。開成山大神宮水路わきの敷で、母と一緒に隠れて、青い空からバラバラと爆弾が降ってくるのを見上げていた記憶があります。

郡山の空襲はそれほどひどかったのですが、一時、本宮に疎開して、私はそこから本宮小に入学することになり、中学二年生までおりました。

戦後の窮乏時代ではあったのでしようが、子どもの私にとってはそんなことは何一つなく、毎日が青空で太陽が燦々と照っていた気がします。たくさんの従弟がいたし、友だちもたくさんすぐできました。

本宮というところは、今でもそうですが、すぐ近くに阿武隈川や、毎年水害をもたらす安達太良川が流れ、野っ原もたくさんあって、夏の川での水泳、冬の池や田んぼでのゲタスキーと子どもの遊び場には事欠きません。朝から晩まで外を駆け回っていたよう

に思います。さらに、おじたちの導きで登山に連れて行ってもらったり、戦後のボーイスカウトでは語り草の「富士山麓」や、「蔵王」の野宮に参加させてもらったことなど、すべてが私の血肉となった貴重な体験でした。

県知事になってから「自然との共生」の展開で、いわき湯本温泉郷の故里見庫男君や、県山岳会長の佐藤一男さんの御案内で、鬼ヶ城山頂の道伝い、満開に咲き乱れる馬酔木の自生地をみせてもらって、たいそう感激したことがあります。

ゲマインシャフトだ

そういう感覚が、知らないうちに私に培われていたのは、幼少時山野を駆け回り、ボーイスカウトの野営活動などがあったからではないでしょうか。

一度だけ、父にこっぴどく叱られたことがあります。夕方に家に戻ったら、父に呼ばれました。暗くなっていたかもしれません。

「栄佐久、これ買ってきてくれ」と、お使いを頼まれたのです。私はすぐに「いくら小遣い

をくれるか」と、当たり前のように父に聞きました。

そしたら父は、いきなり怒り出したのです。

「おまえは何言ってるんだ。小遣いをもたえなきや、親のお使いもできない、おまえはそんな根性のくさった男なのか」

遊び疲れてお使いなんて面倒くさいな、とちよつと思っただけだったので、父のあまりの怒りように私はあつげにとられて立ちすくんでしまいました。

なんで叱られたのか、その時は気がつかなかったのですが、今考えてみますと、父は親子の関係なんていうのは、後で習った言葉でいうと、「ゲゼルシャフト(利益社会)ではなく、ゲマインシャフト(共同体)だ」と言いたかったのです。

日本、大変なことに

つまり、世の中は全て金や経済の関係で成り立っているわけではない。もっと大切な信頼関係や人間関係があると

いうことを、父は私に教えるようになったのです。

知事時代に駅のコンクリート通路等に、座り込んで話し込んでいる少女たちの姿がありました。

これを見て、この子たちが一番信頼し、話ができるのは、もはや家族ではなく、友だち

しかいないのかもしれない、と自分の少年時代のことを思い出して、日本は大変なことになっていると考えました。

さらに、先の震災で双葉郡の鎮守の森を中心とした三百

のコミュニティは失われ、「人と人との共生」が、ずたずたに断ち切られました。そうした今、改めて人と人との「絆」について、心をこめて結び直していかなければ、日本の明日はやってこないのではないのでしょうか。

|| 続く

*題字は、石川進さん(本誌「私の博物誌」執筆)

著者プロフィール 佐藤 栄佐久 (さとらう・えいさく)

1939(昭和14)年6月24日生まれ。福島県郡山出身。県立安積高校、東京大学法学部卒。青年会議所活動などを経て83年の第13回参議院選挙に自民党公認で出馬、当選。88年、参議院議員を辞職して同県知事選に出馬、以後、5期連続当選。

知事在職中は、教育、環境問題に尽力する一方、東京一極集中、道州制などについて否定、さらに、政府、電力会社が進めるプルサーマル計画の導入についても反対を唱えるなど、“戦う知事”として県民の人気を集めた。ところが、県発注のダム工事に伴う「汚職事件」に関与したとされる実弟の逮捕によって、県政を混乱させた責任をとり、2006年9月、5期目の任期途中で辞職。その後、自身も逮捕される。12年10月、最高裁は弁護側、検察側双方の上告を棄却、懲役2年・執行猶予4年の最高裁判決が確定した。

☆ ☆
*高裁の判決は、「有罪」とする前提がすべて崩れているにもかかわらず、「無形のわいろ」や「換金の利益」といった従来の法の概念にはない不思議な理論と論法で「有罪」とした。この結果、「罪自体が不明」とし、「冤罪」を指摘する声も大きい。

著書に、『知事抹殺一つけられた福島県汚職事件』などがある。現在は、全国各地で国の体制・体質、原発問題などについて講演活動を展開中。

オールカラーでおくる、まるごと1冊いわきの本

いわき

◆オールカラー/158頁 定価/2,100円(税込)

美しい写真とともにおくる、いわきのしられざる歴史と文化。読み終えたあと、いつもの風景が違って見えてくるはずですよ。

写真/アクアマリンふくしまの夜景(撮影・赤沼博志)

大好評
発売中!

歴史春秋社 TEL.0242(26)6567 FAX.0242(27)8110